

創政会視察報告書

1 視察先・目的

- 北海道旭川市
「まちなか活性化交流拠点創出事業
について」
- 北海道網走市
「アドプト・プログラムについて」
- 北海道斜里町
「知床博物館について」

2 期 間

平成24年7月2日～7月4日

視察報告書

日 時	平成24年7月2日（月） 午後2時から3時30分
視 察 先	北海道旭川市
視 察 項 目	まちなか活性化交流拠点創出事業について
視 察 者	創政会（安藤里美、伊藤正治、林秀人、渡邊眞弓、伊藤公平、富田一太郎、青木志浩、江端菊和、大島大東、勝崎泰生、土師静男）
視 察 内 容	<p>J R旭川駅から真っ直ぐ北方面に800mほど伸びる通りを『平和通買物公園』（昭和47年6月に誕生した、日本で初めての恒久的歩行者天国）と称し、この買物公園を中心軸とする中心市街地には商業、業務、居住等の多様な都市機能が集積していた。しかし、近年、車社会の進展や生活スタイルの変化、郊外型の大規模な商業施設の開業などが進むとともに、空き店舗も増加傾向にある。その結果、中心市街地の人口も市全体の小売業年間販売額における中心市街地のシェアも減少の一途をたどっている。</p> <p>そこで旭川市は、こうした衰退を放置しておくことは地域全体の地盤沈下につながると判断し、市民の意見を取り入れながら新たに中心市街地活性化基本計画を策定した。</p> <p>この基本計画に基づき、これまでに旭川商工会議所が担ってきた賑わい創出事業に加え、市民や団体が実施するイベントの支援やイベント開催に関する手続の調整・サポートを行う、まちなかマネジメント協議会を立ち上げた。</p> <p>また、この協議会の運営拠点として整備したまちなか交流館内には、観光情報センター、地場農産物等を食材としたランチメニューを提供する食堂、地場産品を販売する売店等が入り、市街地の活性化に取り組まれている。</p>
所 感	<p>視察したまちなか交流館には、上述の施設のほか、高校生を中心とした若者の学習・交流などができるスペースもあり、観光客のみならず、市民が気軽に立ち寄れる、人・もの・情報の拠点の場になっていることに感心した。</p> <p>本市には旭川市のように、市を代表する商店街はないが、佐布里緑と花のふれあい公園にはイベント等を行うスペースもあり、梅の館もある。旭川市のように行政のリーダーシップのもと、マネジメントを統括するプロを雇用し、本市の活性化のために佐布里緑と花のふれあい公園等の施設を活用するなど、今後、本市において、まちなかにぎわいの創出を検討する上で参考となる視察であった。</p>

視察報告書

日 時	平成24年7月3日（火） 午後2時から3時30分
視 察 先	北海道網走市
視 察 項 目	アドプト・プログラムについて
視 察 者	創政会（安藤里美、伊藤正治、林秀人、渡邊眞弓、伊藤公平、富田一太郎、青木志浩、江端菊和、大島大東、勝崎泰生、土師静男）
視 察 内 容	<p>網走市は、豊かな自然景観が特徴の観光の町である。女満別空港のジェット化やオホーツク流水などで観光客も増えていたが、平成4年度をピークに減少しつつある。そこで花で観光を盛り上げようとアドプト・プログラムを利用した花作りが始まった。アドプトプログラム（里親制度）とは、1985年にアメリカ合衆国で生まれたシステムで、市民と行政が協働で進めるまち美化プログラムのことである。</p> <p>網走市では、天都山レークビュースキー場を夏の間、花畑にしようと、15年より天都山周辺花園整備事業（はな・てんと）のアドプト・プログラムを開始した。24年度は、42団体918名がボランティアとして登録され、3.8ヘクタールの花作りに取り組んでいる。はなてんとまつりの開催、写真コンクール、天都山カフェのオープンなどのイベントの開催により、年々、観光客も増加している。20年には、日本観光協会主催の「第10回花の観光地づくり大賞」奨励賞を受賞した。</p> <p>また、18年には網走刑務所の旧作業用地（農場）約80ヘクタールを払い下げにより取得し、19年に網走市大曲湖畔農地利用計画を策定した。大曲湖畔園地においても24年度より、アドプト・プログラムを活用した整備を開始し、希望する市民団体や個人が責任を持って約半年間、宿根草や小果樹、樹木などの管理をしている。さらに、大曲湖畔園地整備利用協議会を通じて整備内容等について議論を重ね、市民の意見を整備計画に反映している。</p>
所 感	<p>これらの事業に参加する団体は、全くのボランティアであるが、住民参加で観光を盛り上げている点は大変すばらしいと感じた。特に、大曲湖畔園地の80ヘクタールという想像もつかないような広大な土地で、費用もかけずに住民や企業の協力で施設を整備・運営するのは、行政・参加団体ともに大変な努力が必要であると思われる。年々、イベントや催しを織り交ぜながら徐々に拡大し、事業を継続していることに敬意を表するとともに、見習うべき点が多いと実感した。市と地域が協働しての、環境美化を通じて施設運営と観光客を増やす網走市のアドプト・プログラムの手法は、本市においても、今後の市民協働を模索する上で、大変参考になる視察であった。</p>

視察報告書

日 時	平成24年7月4日（水） 午前10時から11時30分
視 察 先	北海道斜里町
視 察 項 目	知床博物館について
視 察 者	創政会（安藤里美、伊藤正治、林秀人、渡邊眞弓、伊藤公平、富田一太郎、青木志浩、江端菊和、大島大東、勝崎泰生、土師静男）
視 察 内 容	<p>知床町の基幹産業は農業・漁業・観光業で、農業は小麦・甜菜・馬鈴薯を主体とした畑作農業、漁業は水産資源に恵まれたオホーツク海を漁場とし、サケマスの水揚げが日本一となっており、一次産業と一体となった食品加工業も盛んである。観光は知床半島がユネスコの世界自然遺産に登録され、知床半島周辺海域は最も南まで流氷が押し寄せる海で、流れがもたらす特異な生態系と多様な動植物の生息が評価され、年間約150万人の観光客が知床を訪れる一方、町も自然環境保護に力を入れている。</p> <p>今回視察した斜里町立知床博物館は、知床半島の生い立ちから始まり、知床半島の先史時代、旧石器時代、斜里のアイヌ文化、開拓の頃、近世の斜里、斜里町100年と歴史を追いながら、遺跡の位置、遺物及び出土物の展示など説明文を添えて、現在の斜里町の歴史を一目瞭然に見ることができる。続いて知床の哺乳類、流氷の動物、知床の森と草原の動物、知床の鳥類、オジロワシとオオワシ、知床の蝶、そして知床の樹木と動植物が展示されている。</p> <p>年間入館者数はおおむね1万2,000人程度であるが、年々減少傾向にある中、同博物館では、各種展示会・講演会・講座の実施や、教育機関と連携した事業展開に取り組まれている。</p>
所 感	<p>展示物の内容については、質・量ともに圧倒されたが、斜里の歴史と出土物の展示方法については、説明板、順路指示板ともに大きく、時代別に整理され、誰もが見やすく、わかりやすく展示されていたのが印象的であった。また、海・山・陸の生物について剥製が展示されていたが、背景の森、海などリアルな情景が立体的で迫力のある演出も印象的であった。</p> <p>展示方法、各種イベントなど来館者を増やすべく工夫をしているが、実際の来館者数は減少傾向にある。これは本市の歴史民俗博物館も含め、多くの地域の博物館が抱える課題にも共通していると思われるが、地域の博物館は、過去の歴史を知るうえでも、また次世代に伝え、残し、語りつがなければ忘れ去られてしまう貴重な財産であると考えます。</p> <p>本市の財政がひっ迫する中、こうした文化的公共施設をどう維持していくのか、費用対効果だけではなく、将来的、総合的な見地から、今後、検討していく場面において、この視察で得た知識を活かし、本市の特色を活かした博物館、文化施設の運営に寄与していきたいと実感した視察であった。</p>